

AIにはできないこと

2～3日前、東京のJR山手線が深夜に無人運転のテストをしたというニュースがありました。自動車の自動運転技術も進歩を続け、実用段階に近づいてきたようです。SFの世界の話と聞いていたことが次々に現実になってきています。それらは、人工知能AIの進歩によるものです。

2年ほど前、AIの「東ロボくん」が東大合格を断念したというニュースがありました。これは「人工知能は東大に入れるか」というプロジェクトのもとに研究開発されてきたAIが、読解力に課題があるため東大合格を断念したという話です。これだけなら「やはりAIには限界がある。」という話のようですが、実はこの東ロボ君は、進研マーク模試で偏差値58をとり、東大合格には届かないものの、国公立33大学、私立441大学でA判定だったそうです。数学に限れば偏差値65でした。AI恐るべしと言ったところです。

東ロボ君の話は2年ほど前のことですが、AIにとって、2年というのは大きな進化を遂げるには十分な期間だと思います。今もし、東ロボ君のプロジェクトを復活させればどうなるのだろう？ と個人的には思っています。

ところで、将棋で中学生時代から数々の史上最年少記録を更新している藤井聡太七段は、普段はAI相手に練習しているそうです。一方で、同じく将棋の世界で、先日惜しくも無冠となりましたが、「永世七冠」として国民栄誉賞が贈られた羽生善治九段は、「強い将棋の打てるAIは作れるが、相手といい勝負をして、真剣勝負をしているように見せて、負けてあげる、いわゆる「接待将棋」はAIではできない」と趣旨のことをおっしゃっています。

AIの進化により、10年から20年の間に、日本の労働人口の約49%が技術的にはAI等で代替可能になるという予想もあります。みなさんは、このような時代に社会に飛び出していくことになります。AIにはできないこと、AIが持てない力をつけていかなければならないと思います。

さて、冬休みに映画を何本か見ました。その中の一つに『こんな夜更けにバナナかよ』という映画があります。この映画では、筋ジストロフィーという難病で筋力の衰えが進行し、首と手しか動かすことができず、24時間世話をする人が必要な鹿野さんという男性が、入院を拒んで自らボランティアを集めて自立生活をしています。夜中に「バナナが食べたい」といってボランティアの人に買い物に行かせるなど、わがまま放題の鹿野さんという人物を大泉洋さんが演じました。

そんな鹿野さんを、大勢のボランティアが、まるでアルバイトでシフトを組むように交替で24時間世話をします。その中で、高畑充希さん演じる美咲さんというボランティアは、わがままな鹿野さんに最初は反発するものの、自分に素直で困難な状況でも夢を追い続ける鹿野さんの人間力に惹かれていきます。彼女の恋人で、同じくボランティアの若いお医者さんを三浦春馬さんが演じて、彼の医者としての成長も描かれていきます。

映画としての脚色は当然ありますが、大勢の人が鹿野さんの人間としての魅力に惹かれ、ボランティアを続けたという実話を元にしたお話です。実際のモデルの鹿野さんはお亡くなりになり

ましたが、延べ500人いたボランティアの方と鹿野さんのお母さんとの交流が今も続いているそうです。

ここで考えました。大勢の人がボランティアを続けたのはなぜなのか？ 彼ら、彼女らを突き動かしたモチベーションは何なのか？ 目の前の損得勘定だけでは、ボランティアの人たちの行動は説明できません。ボランティアの人たちは、与えるだけではない、多くのものを与えられたからか、と思いました。いや、むしろ、鹿野さんを支えながら、実は鹿野さんに支えられていたからだと思いました。

そして、この関係は、先ほど言った「AIにはできないこと」の重要な部分ではないかと思えます。羽生九段がおっしゃった接待将棋も、鹿野さんとボランティアの人たちとの心のつながりも、二つの例えは大きく異なりますが、相手の立場を判断して行動する力であり、「愛情」であったり、「尊敬」であったり、「思いやり」であったり、「情熱」といった人間特有の資質に基づく力ではないでしょうか。それはAIが進化しても獲得できないものであり、AIがますます進化していく社会において、皆さんにもってほしい力だと思います。

(平成31年1月 3学期始業式の式辞から)